

令和元年6月12日現在

機関番号：27104

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11614

研究課題名(和文) 情報提供を基盤とした術後せん妄に対する看護師と家族の協働的ケアプログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a care program incorporating collaboration between nurses and families for postoperative delirium patients based on providing information

研究代表者

福田 和美 (Fukuda, Kazumi)

福岡県立大学・看護学部・教授

研究者番号：50405560

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、患者の術後せん妄に対する看護師と家族の協働的ケアプログラムの開発を目指し、協働的ケアの基盤となる情報提供に着目し、看護師と家族の情報共有の現状把握を目的とした。まず、術直後の患者の家族とケアを行う看護師各8名にケアや面会時の参加観察と半構造化面接を行ったところ、看護師の情報提供内容と家族の求める情報内容の相違がみられた。

次に術後せん妄患者の家族への情報提供について、看護師5名に半構造化面接を行った。看護師は家族の心理状態や理解度、関係性から情報量や内容を決定し、情報提供を行っていた。また、安全確保のための身体拘束については、説明し同意を得ているものの、倫理的葛藤を感じていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において、術直後の患者の家族の求める情報と看護師の情報提供内容の違いが明らかになり、家族のニーズに応じた看護師の細やかな情報提供の必要性が示唆され、術後の患者家族の支援の検討に役立つといえる。また、看護師の術後せん妄患者の家族への情報提供の実態から、看護師が家族と密なコミュニケーションを取り、情報共有を行うことが、看護師と家族が協働して患者の術後せん妄ケアの強化になり、術後患者の回復促進につながる。

研究成果の概要(英文)：This study aims to develop a care program incorporating collaboration between nurses and families of postoperative delirium patients focusing on providing information, and to describe the present state of information sharing between nurses and families. Observations of the care and family visit settings and semi-structured interviews performed with 8 families of postoperative patients and 8 nurses in charge of these patients showed that families sought information different from that provided by the nurses.

Next, semi-structured interviews were performed with 5 nurses about providing information for families of postoperative delirium patients. These nurses determined the amount and details of the information, and provided information by considering families' mental state, understanding, and relationship with the patients. The nurses had obtained informed consent to use physical restraint to ensure the safety of patients, but felt that ethical conflicts arose.

研究分野：臨床看護学

キーワード：術後せん妄 患者 家族 協働 情報提供

1. 研究開始当初の背景

術後せん妄は、術後合併症の一つであり、発症により入院期間の延長や二次的合併症、予後に影響を及ぼすことが明らかになっており、せん妄予防、早期発見が重要視され、アセスメントスケールやリスク要因に焦点を当てたケアの検討が行われている。

特に術後せん妄の発症は急激であり、発症期間は短期間ではあるが、患者の術後の順調な回復を願っている家族にとっては予期しない突然の出来事である。研究者らは、その時の家族支援について研究を重ねてきた。その研究成果から、術後せん妄患者の家族は、ストレスフルな状況におかれ、回復過程にある患者の今後に対して不安を抱いていた。また、特徴として患者を「助けたい」と思うとともに、どのように関わってよいのかわからず、家族が関わっても変化しない患者の症状に対して失望や落胆の気持ちを抱いていたことが明らかになった。これにより、看護師の術後せん妄を発症した家族に対する患者の正確な情報提供や患者の状況に応じた家族への対応とともに、家族の効果的なケア参加の必要性が示唆された。

急性期の中では看護師が患者の家族と良好なリレーションシップを取り、看護師の家族への説明や行動が、家族のポジティブもしくはネガティブな行動に影響することや看護師の介入で家族が、患者への心理的ケアに参加することは、患者の心理的回復に有効であることが明らかになっている。このように看護師の助言や説明によって家族が患者に関わることで、患者への良い影響がもたらされている。

せん妄患者の家族はせん妄状態の患者が体験している感覚や、患者に対して行えるサポートに関する情報提供を望んでいた。また、看護師は家族からの情報や支援が患者のケアに有効であることを説明する必要性が示唆されている。さらに、家族は、医療者にはできない細やかな気づきや配慮を患者に行っており、看護師の家族に対する一方的な支援だけでなく、ともに患者のケアを行う必要性も示唆されている。

看護ケアにおける対象者との協働的パートナーシップにおいては、力を分かち持つためには情報の共有 Sharing information が求められる。したがって、看護師と家族がパートナーとなり、患者に関する情報交換を密に行い、ケアに取り入れて、せん妄ケアのプログラムの一つとして取り組むことでいくことで、家族のニーズに応えるとともに患者のせん妄ケアの強化につながると考える。しかし、臨床においてせん妄ケアのために看護師と家族が相互に情報提供を行い、ケアに活用しているかについては明らかにされていない。術後せん妄は発症率が高いことから、術後せん妄に対しては予防的ケアとともに発症時のケアも合わせて検討していくことが重要である。

2. 研究の目的

本研究は、患者の術後せん妄に対する看護師と家族の協働的ケアプログラムの開発を目指し、協働的ケアの基盤となる情報提供に着目し、看護師と家族の情報共有の現状把握を目的とした。情報提供を基盤とした術後せん妄予防に向けたケアプログラム検討を行う基礎的資を得るために以下の2つの研究目的を設定し、研究を進めた。

- (1)急性期場面（手術直後）の患者の家族と看護師の情報共有の現状を明らかにする。
- (2)術後せん妄患者の看護場面における看護師から家族への情報提供の現状を明らかにする。

3. 研究の方法

- (1)急性期の場面として、手術直後のケア場面における看護師と家族の情報共有

研究対象者

手術直後の患者の家族とケアを行う看護師各8名

データ収集方法

- ・術直後のケアおよび面会場面の参加観察

手術直後のケア場面における看護師と家族の関りの場面において研究者が立ち合い、家族および看護師の行動について参加観察を行った。家族の表情や行動に関しては先行研究およびエクマンの表情分析項目を参考に作成したチェックリストを用いた。

- ・半構造化インタビュー

家族および看護師に対して術後のケアや面会時の場면을想起しながら、看護師には、家族の様子や提供した情報内容、活用したい患者の情報について家族には、患者の状態や看護師から聞いた情報、求める情報について、インタビューを行った。

データ分析

家族と看護師のインタビューによる音声データはそれぞれ逐語録を作成し、質的帰納的分析を行った。逐語録のデータを繰り返し読み、看護師と家族の情報共有に関連した部分に着目し、語った内容を分析し、類似比較しながらサブカテゴリ化を行った。サブカテゴリ同士の関連性を熟考し、それぞれの場面の特徴や共通点をまとめ、カテゴリを導き出した。分析においては、研究者間で分析を繰り返し行い、データの妥当性を確保に努めた。また、インタビュー中に研究対象者が語った内容を要約し、研究対象者に確認しながらインタビューを進めた。参加観察で得たデータは副次データとして用いた。

倫理的配慮

本研究を行うにあたり、研究者の所属する研究機関および研究フィールドとなる病院の倫理審査委員会の承認を得た。

(2)術後せん妄患者の家族に対する情報共有の現状

研究対象者

術後せん妄患者の家族への看護経験を有する看護師 5 名

データ収集方法

研究対象者に対しては、経験した術後せん妄患者の看護場面での家族との関りにおける情報共有について半構造化インタビューを行った。

データ分析

看護師のインタビューによる音声データは逐語録を作成し、質的帰納的分析を行った。逐語録のデータを繰り返し読み、患者の術後せん妄発症時の看護師と家族の情報共有に関連した部分に着目し、語った内容を分析し、類似比較しながらサブカテゴリ化を行った。サブカテゴリ同士の関連性を熟考し、それぞれの場面の特徴や共通点をまとめ、カテゴリを導きだした。分析においては、研究者間で分析を繰り返し行い、データの妥当性を確保に努めた。また、インタビュー中に研究対象者が語った内容を要約し、研究対象者に確認しながらインタビューを進めた。

4. 研究成果

(1)手術直後のケア場面における看護師と家族の情報共有

手術直後のケアを行う看護師

8名の看護師の年齢は20代～40代であり、看護師経験年数は3年6か月～24年であり、外科病棟の経験は1年～4年であった。担当した患者は消化器疾患3名、呼吸器疾患1名であった。手術を受けた患者の家族の年齢は50代～70代、性別は女性6名、男性2名であった。患者との続柄は、妻が4名、夫1名、子どもが3名であった。手術を受けた患者は消化器疾患5名、整形外科疾患2名、呼吸器疾患1名であった。

手術を受けた患者のケアを行う看護師については、【家族の心理状態を捉える】、【術後早期の家族の面会】、【家族への配慮】、【術後の患者に関する情報提供】、【多角的な情報収集】、【ケアの効果を実感】、【家族のネガティブな行動や発言を気にする】の7つのカテゴリが抽出された。

看護師は【術後早期の家族の面会】という思いのもと、術直後のケアをスピーディに行っていた。看護師は、家族に対して麻酔の覚醒状態や出現している症状の理由など【術後の患者に関する情報提供】を行い、家族が患者をイメージしやすいように具体的な説明を行っていた。また、患者のケアや家族との対話、事前に収集していた家族の状況から【家族の心理状態の把握】を行い、家族が安心、安楽な環境で面会できるよう【家族への配慮】を行っていた。さらに家族の面会中に行った患者へのケアを振り返り【効果的なケアの手ごたえ】を感じていた。一方、家族を捉える際に特異的な行動やケアに対する不信感など【家族のネガティブな行動の有無を気にする】看護師の姿もあった。

手術直後の患者の家族

手術直後の患者の家族については、【患者の身体の状態を把握】、【ひとまずの安心感】、【家族なりの患者への対応】、【看護師への希望やケアへの期待】、【気がかり】の5つのカテゴリが抽出された。

家族は術直後の患者の姿を目にすることや対話、過去の経験から【患者の身体の状態把握】を行っていた。また、術後の患者の状態から、手術が無事に終わったという安堵感や不確定ではあるが大丈夫という【ひとまずの安心感】を抱いていた。家族は自ら術後の患者と関り、患者の訴えを捉え、対応や気遣いを行う【家族なりの患者への対応】を行っていた。また、家族には【看護師に対するケアの希望や期待】が生じており、患者に対するケアへの希望や看護師が行うケアや家族に対する対応から看護師に任せておけば安心という期待を抱いていた。さらに術後の疼痛や麻酔の影響、心電図モニターの波形の変化など【気がかり】が生じていた。

以上の結果より、看護師は家族に対して患者に行われている治療やケア、患者の状態についての説明を行っているものの、家族はさらなる詳細な情報を求めている。看護師の行う情報提供と家族の求める患者に関する情報のレベルの違いが明らかになった。このことは術後のみならず、術後せん妄発症時における患者の不安定な状況下でも同様のことが考えられる。

(2)術後せん妄患者の家族に対する情報共有の現状

5名の看護師の年齢は20代～40代であり、看護師経験年数は5年～21年であり、外科系病棟の経験は1年～6年であった。1名は認定看護師であった。術後せん妄患者の家族に対する情報共有の現状については、【患者に生じている症状に関する説明】、【家族の心理状態を考慮】、【家族への働きかけ】、【家族からの患者に関する情報収集】、【家族の存在をせん妄ケアに活かす】、【看護師の役割としての自覚】、【家族の術後せん妄に対する理解の困難さ】

【身体拘束に関する葛藤】の8つのカテゴリが明らかになった。

看護師は、術後せん妄患者の家族に対して、【患者に生じている症状に関する説明】を術前から行き、イメージ化を図り、発症時には【家族の心理的状态を考慮】したうえで、面会前に患者の状態に関する説明を行っていた。また、看護師自ら【家族への働きかけ】を行い、家族の状況の把握に努め、【家族からの患者に関する情報収集】を行い、ケアに活用していた。さらに、家族の面会や家族の関わりの促しを行うことで【家族の存在をせん妄ケアに活用】していた。看護師は患者の尊厳や家族への説明など【看護師の役割としての自覚】を持ち、術後のせん妄ケアを行っていた。しかし、患者の状況や家族の認識不足により【家族のせん妄に対する理解の困難さ】を感じ、せん妄の二次的障害予防のための身体拘束については、必要性の説明を行い、同意を得ているものの【身体拘束に関する葛藤】も感じていた。

以上の結果より、看護師は術後せん妄に関する事前の家族の認識やせん妄に対する受け止め状況に応じて、個々の家族に応じた適切な情報提供が求められる。入院期間の短縮化により家族との関わりが少ない中で、術後せん妄時のケアおよび予防的なケアにおいては、看護師と家族のコミュニケーションを充実させることで、ケアの協働に向けた取り組みの実現に近づく。

5．主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

- ・ Kazumi Fukuda, Hisako Nakao (2017) : An overview of how nurses interact with the families of postoperative patients , The2nd Asia-Pacific Nursing Research Conference (Taipei) .

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：中尾久子

ローマ字氏名：(NAKAO, hisako)

所属研究機関名：九州大学

部局名：医学研究院

職名：教授

研究者番号(8桁)：80164127

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。